

巻頭言

高知工科大学紀要第13巻を発行することとなりました。今年は2つの特集を企画しました。第1は「高知工科大学新時代」、第2は「里山基盤科学技術の社会实践モデルプロジェクト」です。

高知県は他の都道府県に比べて少子高齢化が進み、高齢化率は全国で2番目に数えられています。このことを始めとして、全国、さらには全世界に先駆けて地域の諸問題が現れていて、その問題解決への試みは、この地域のものではなく、これから経験するであろう他地域でも大いに役立つと言われています。

日本の高度経済成長期には、重厚長大という言葉に象徴されるように、大型・大量の方向を目指すことにより、効率を上げ、恩恵を広く普及させてきました。交通インフラは鉄道や大型バスを中心に大量輸送を基本としていました。そこに、自家用車の普及による個人の移動が入り込んできましたが、今、自動車が運転できない子供や高齢者のモビリティをどのように確保するかという問題が高まっています。また、電気・ガスや上下水道などのライフラインについても、大規模な供給場所・処理場に集約させるのが基本となっています。さらに、工業製品なども汎用的なものを様々な人々が共通に使ってきました。このような状況で将来に向けては、一方ではコンパクトシティ化により効率を下げないようにしながらも、他方では大型・大量になじまない過疎地域での定住を可能にするような分散型の基盤技術や社会・生活システムを開発する必要があります。本巻の特集2は後者の問題への回答の端緒を切り開く研究の着眼点を、幅広い視点から紹介しています。

特集1は香美キャンパスに永国寺キャンパスを加え、経済・マネジメント学群に発展した本学の、新たな時代を迎えての研究成果を紹介します。実はこの特集も、特集2のテーマに深くかかわっています。ここでは、大学と地域との連携や、大学と産業界・行政との連携の具体例を紹介します。そして、今後の社会の方向を見極め、将来を設計するフューチャーデザインは、本学の経済系教員グループが力を入れて取り組んでいる課題であり、長期的な観点で大学の大きな社会貢献が果たせるものと信じています。過去のしがらみがなく、客観的な目で社会を見つめたうえで、あるべき姿、向かうべき方向を提案することは、大学であるからこそできることです。

これ以外にも、本学における様々な研究や調査・活動の報告がなされています。大学全体からすれば、ごくわずかな部分ですが、本学の姿の一端をご理解いただければ大変幸いに存じます。

学長 磯部雅彦